

本尊論

故 忽滑谷快天

道元禪師は常に純一の佛法を提唱せられたもので、その所説の法門は禪宗と名く可きものでなく、正法眼藏涅槃妙心であると力説せられました。是れが達磨大師以來相傳の正法であつて諸宗と對立すべきものでなく、佛法の總府と謂ふ可きもので、一經一論を據り所として建立したる諸宗と對立する宗旨ではないのである。されば道元禪師の法門は佛教の眞髓であり極致であるから、此意味に於て本尊論を話して見度いと思ふ。

吾々の信仰の對象となる本尊とは何かと云へば私は一口に宇宙的なる心靈と言つてゐます。是れは基督教や回々教の神の如く偶像的に固定したるものではなく、萬有を綜合統一したる全一的な生命體としての佛であります。私は佛教の精髓と考へてをる大切な教理より此主張を爲すに至つたもので、用語が新しいので佛説と違ふやうに思ふ者もあるが決して左様ではない。で然れば此説が如何なる佛教々義から起つて來たかに就て順序を逐つてお話して見度いと思ひます。先づ佛教學説の進展から見ますと、

第一に心識論から宇宙的心靈といふことが云ひ得られるのであります。佛教では心を六つに分けて六識と説いてゐる。

即ち眼耳鼻舌身意である。かく最初は六つの識を説いたが、次第に心理的考察が進むで来て更に第七識を説くやうになつた。此識は外界に對して、觀察を爲すものではなく、内に向つて自我を省察する力がある、されば大體自我意識といふてよい。然るに此自我意識を生ずるには、自我なる對象が在らねばならぬ、即ち第七識が認めて我と爲す或者が必要である。そこで第八識を立て、心識の根本としたのである、さて此の第八識は眞妄和合の心識でありますから、此第八識だけではまだ不満足であると考へて、更に第九識すなはち清淨識なるものを立てるやうになつた。で、この識は最も根本的なるものであつて、自性清淨心又は眞心と稱せられてある。原人論には、人間の原を尋ねて眞心に歸してゐる。是に依れば一切生物の起原は眞心であり、其の眞心は不生不滅、昭々靈々たるものである。道元禪師が即心是佛と云はるる時には此眞心を直に佛といふのである。是は我々の分別心を云ふのではない。されば『即心即佛と云ふと雖も、心猿意馬これ佛なるには非ざるなり』と言はれてゐる。禪師は詳かに此眞心を説かれて『一切諸法森羅萬象ともにたゞこれ一心にしてこめずかねざることなし』といはれて、總該萬有の一心なるを示された。是の如き宇宙的にして廣大なる眞心を且く私は本源本佛といふのでありまして、是れが私共の本尊であります、是は佛教の心識論の上から考へた本尊觀でありまして、先きに宇宙的心靈と云ふたのは之を指すのであります。

第二には佛教の宇宙觀から見ますと、(一)佛教では萬有を如何に觀するかと云ふに、最初は有觀でありまして是は萬物が吾々の目に見えるやうに客體として實在するといふ見方で、頗る素朴的な考である、此の有觀に對して空觀が現はれて、萬有は無常であるから、我々が見て居るやうに在るのではない、不斷に變化して定相の認むべきがない、故に

空であると云ふのであつて、此の空觀が大乗の初門であります、其れで此の空觀を説いたのは般若部の經典であるから私は拙著禪學思想史に於て般若經の翻譯を準備時代に於て論じて置いた次第であります。だが、空と云ひますと兎角頑空に陥る懼れがあります、世の中の一切は皆空である無であると考へて斷空に陥るのであります、從てそれは厭世觀になる傾向があるので更に一步を進める必要があるのであります、そこで空と云ても斷空ではなく真空であると説く眞空妙有と云ふ考が出て來たのであります、眞空妙有とは虛無滅無ではなく真空にして、しかも妙不可思議に存在すると云ふのであつて換言すれば、不斷に變轉し進歩し發展する活物であると云ふのであります、即ち萬有を活けるもの生命あるもの生命的存在として見るのであります、此の立場から眺めて見ると一切は一大生命の活躍と見ることが出来る、宇宙的心靈とは此の意味から宇宙的生命ともいひ得られるのであります。

次に宇宙論の(二)として別の方から見て行きます、佛敎の思想として天地間の事物は差別あるものとして一應は認める。是を事と云ふ。即ち宇宙一切のものは差別されたる事實であると見るのである。此事のみを觀ると事物と事物との相互の間に連絡がないのであるが、而し物と物との間に連絡なく不統一のものとして見たる宇宙は甚だ不満足である。故に事物の間に一貫の理を認めて、不統一の如く見ゆる物の間に連絡があるといふのが理觀である。即ち、事と事との間に一理平等の貫通を見るのである。しかし事と理とは一偏に落ちてはならない。そこで『事を執するは元是迷ひ、理に契ふも亦悟に非ず』と古人は言ふた。蓋し事と理と備はらねば眞に宇宙の相を知ることが出來ない。普通の考では理は物の根本すなはち體であり事はその相であると考へるが、かく事と理とを並べて考へると此二を別々なものとする誤に

陥る、故に更に事と理とは不二であつて別々なものではない、畢竟それは一つのことを二方面から観察したものに他ならぬと考へるやうになつた、所謂事理不二觀であります。然しこれだけでは尙ほ満足することが出来ず更に事々圓融無碍と云ふ思想が最後に起て來たのであります。事々無碍とは事物と事物とは圓融無碍で一の中に多があり、多の中に一があり、圓融自在である。且く現前の事柄で云つてみると理學者は物體を分類して固體・液體・氣體の三つに分けてゐるが、この三者は且らく左様に見える處から分けたのであつて決定的のものではない。この三者の間に圓融無碍の關係を見出すことが出来る。即ち空氣は氣體であるが之を冷却して壓縮すれば液體となる。更に冷却壓縮すれば、固體空氣と云ふやうなものも得らるべき筈である。鐵は固體であるが、熱を加ふれば直ちに液體となり、更に加熱すれば氣體となります。故に萬有は熱度の加減に依て三體何れにも成り得るものであつて、三體圓融が萬物の實相である、又理學者は動物・植物・礦物の三つを分けてゐるが是れとても截然たる區別が附けられるものでない。動物と植物の間に就て見ても下等動物と高等植物との間には區別がない、生物無生物もさうである。無生物の中に生物に成り得る要素を持つてゐるから、無機體が集つて有機體となるのであります、何れにしても三者は圓融して無碍なるものである。精神と物質もさうで、物心は一生命に圓融せられ一物の二面に他ならない、かく一切のものが一多相即して圓融無碍であると見るのが事々無碍觀であります。さて宇宙一切のものが圓融無碍のものであるならば天地は一元であつて、此の宇宙的一元が物質、精神、生物、無生物と云ふやうに分化して見えるに過ぎぬ、即ち一切は宇宙的一元に歸せられて仕舞ふのであります、私は此一元を宇宙的心靈と名けたのであります。

第三は縁起觀から見てゆくのであります。縁起とは因縁に依つてものが生じ起る事であります、佛教では萬有が神に依て造られたとは云はない。萬物は如何にして生起したかと云ふ問題に就て之を造物主に歸すれば解り易いが、佛教では造物主を認めぬ故に萬物を因縁生に歸する。而し因縁と云ふのは無なる處から有を生じたのではなく、萬物は本來不生不滅で、其が因縁に依て生じ因縁に依て滅するのだから畢竟無始無終と云ふことになります。涅槃經に「本無今有、此處あることなし」とあるは此の意味に他ならないのであります。そこで萬物は因縁に依て離合集散するものであります。離合集散を可能ならしむる主力を初めは業と考へた。即ち自然界も生物界も總て業力に轉ぜられて生起せる存在であると考へた。是れが即ち業感縁起論であります。これは一切有生のものの善惡の働きに依つて自然界も生物界も生起すると云ふ考へでありますが、業を起すものは心であるから業より寧ろ心の方が根本的であつて、心の働きの依て萬物を生起すると考へる法が正しいとして、唯心縁起觀が生じたのであります。是は縁起の根本の心に求めるのであるが、これも亦不充分と考へるやうになつた。何故なればその心の働は各人みな違つてゐる、その各人各様の心から世界萬有を作ると云ふことになる、我々は各々異つた世界に住み勝手に作つた世界に住むと云ふ事になる。各人各異の心よりも根本的なる萬人共通の心體があるならば、それが即ち真心即ち眞如で、この萬人共通の心から萬有は生起せるものであると考へるやうになつた。即ち個人的な心即ち阿頼耶識からではなく萬人共通の一心、真心から萬有を生起するといふのが即ち眞如縁起であります。而るに萬有が共通の一心から生起するとすれば世界も一體の世界でなければならぬ。又平等で無ければならぬ。所が實際に於ては差別的な平等があるのであるが、此の差別は眞如が無明なる迷妄に動かさ

れて縁起するからであるとするのであります。此場合眞如は水の如く無明は風の如く、差別の現象は波の如くであるから、眞如は風の縁を假らねば活動が出来ない。さすれば此の縁起觀は二元的であつて、眞如と無明の對立が明かに存在してゐる。従て現象界は迷界、本體界は悟界、前者は差別、後者は平等といふやうに二元的となるのであります。仍て眞如そのものを活物とし風の外縁を藉らずとも水それ自身眞如それ自身に活動性あるものとして、眞如の一元に歸する考が起て來た。此說に依れば無明も亦眞如で、眞妄不二と云ふ高次な考へで、縁起觀發達の最終に位するものである。私は之を佛力縁起と云うてゐる。この佛力は眞にして如なるものであつて不思議に諸法を縁起するものであります。この一元絶對の眞如を宇宙的靈と云ふのであります。

道元禪師は佛性の卷に於て『有情悉有の依正、しかしながら、業増上力にあらず、妄縁起にあらず、法爾にあらず』と示されて、宇宙も人生も皆業力や妄心で生ずるのでなく、佛性の全體なるを説かれて居ります。

第四に佛身觀の上から見ますと、佛とは原始佛教では謂ふ迄もなく歴史的釋尊のことであり、處が釋尊の入滅に依て歸依の對象たる佛を喪つたものだから滅後は勢ひ教法を以て之に代らしめねばならなくなつたのである。そして之を法身として歸依の目標としたのである、而して此の教法なるものは釋尊が勝手に造つたものではなく宇宙の原理を説かれたものであるから、此の理なるものは永久的なるものであつて此の宇宙的なる理を法身とみる。すなはち理法身と云ふ考が起て來た。此の法身に續いて起つたのが報身の考へであります。報身と云ふのは修行の功に報いられた佛身のこと、釋尊の前生の物語的に説て或る時は鹿になつた或る時は仙人になつた。そして永い間修行なされた。釋尊は其の

因行に報いられた萬徳圓滿の身であつて、肉身ばかりの聖者ではないと云ふ考へであります。そこへ更に應身と云ふ考へがあります。應身とは衆生の機根に應じて出現せられた佛と云ふ意味であります。故に法報應三身中の法身は宇宙的理體に名けたるものであり、報身は此の佛の萬徳圓滿に名けたるもの、最後の應身は無限なる佛身が有限化されたるものに名けたものであつて、三身説は畢竟全一なる佛身を三方面から見て名けたるものでありますから三身は即一であります。この一は全一であるから本より數量の一ではなく綜合統一の一であります。この三身即一の考は大乗佛教最終の佛身觀であつて、大乗佛教の精髓であります。佛教には二身三身四身十身等の説があるが、要するに三身即一であります。

道元禪師は「この三千大千世界は如來全身なり」「謂ゆる世界は十方皆佛世界なり」と示されてゐる。これを私は宇宙的靈と呼んでゐるのであります。

第五は成佛論の上から見るのであります。成佛とは佛教徒の最初の考へでは羅漢に成ることであつた。是を成就すれば此の世に再び生れて來ることは無いと云ふのであります。蓋し此の世は無常にして又苦痛多き無價値のものであるから、此の世に生るべき原因を絶滅して安樂を得んとするものである。而し是れは我一人だけ苦みから逃れやうと云ふ利己的な考へで、世間の人が皆苦んで居るのに自分一人三界を超越せんとする自調獨善は釋尊の本意ではあるまいと思ふやうになつた結果、こゝに自他同じく成佛することを目指す菩薩の行が起て來たのであります。菩薩は生々世々、自未得度先度他の救世の管みをすると言ふのである、菩薩が此の世を捨ずして修行し、最後に悲智圓滿の佛となる、これが

第二の成佛説であります。所が悲智圓滿の佛となるには三祇百劫と云ふ非常に長い時間を要し、五十二位と稱する修道の階梯を透過せねばならぬと云ふ條件が附けられてある、而し其んな長い年月を要すると云ふならば、それは永久に成佛が出来ないと云ふと擇ぶ所がない。又此の考へは成佛の理想を非常に遠きに求めてゐるが理想は究局のあるべきものでない。一の理想が遂げられ、ば、更に次の理想が産れて來て際限がない。かくては成佛は到底望みなき事になる。そこで是の缺を補ふ爲めに即身成佛説が生れて來たのであります。眞言、天台、華嚴等の諸宗は皆此説によるのであります。而し是れにも轉迷開悟、斷惑證理と云ふ條件が附いてゐる。然らば是れも亦迂遠な成佛説である。なぜならば斷惑證理を遂げ得る人が世間に何人あるか、甚だ心細いことになつて仕舞ふ。特定の聖人賢人で無ければ遂げ得られぬことになつて仕舞ふ。處がさう云ふ聖賢は百千萬人中一人か二人しか生れて來ぬ。無智愚癡の我等大衆には到底出来ないことで不換紙幣を持つてゐるやうなものである。釋尊はさう云ふ迂遠な教を説いたのではない。恐らくこれは方便で釋尊の本懷ではあるまじ。

かくて此處に往生成佛の思想が生れて來たのである。即ち斷惑證理の必要なく、煩惱具足のまゝで成佛すると云ふ思想であります。是れ即ち彌陀の本願に依て西方極樂淨土に往生せんとするものであるが、彌陀の本願は其前身たる法藏比丘が修行のとき立てた誓願であります。而し既に法藏比丘が成佛して阿彌陀如來に成つた以上吾等は往生決定である。故に此の本願を信すれば愚癡無智にして而も成佛が可能であると云ふのであります。しかし更に成佛説に就て本來成佛説と云ふ一層徹底した思想が古來禪僧に依て唱へられた、それは未來成佛を遂げるのではなく一切衆生は本來成佛であ

ると云ふ考へであります。十方世界が佛世界ならば吾等は佛國土中に生死して居るのであり、十方世界が如來全身ならば吾々は佛身中に活動してゐるのであつて寸時も是れから離れることは出來ぬ。故に本來成佛なることに氣付きさへすればそれでよいのである。愚癡無智の人も智者賢者も差別はない、此の考へは往生成佛以上である。往生成佛説には物語的神話的な部分があるので尙ほ端的でない嫌があるが本來成佛説にはそんな廻りくどい修飾がないだけ一層適切であつて一言に信受できる。私は此の本來成佛説を佛敎終局の思想、佛敎の眞髓と心得てゐる。そして此の十方世界を全身とする廣大なる佛、絶大なる如來を宇宙的心靈と呼び是れを本尊とし佛心に隨順し、その佛徳を日々夜々に體現することを以て我等の生命としてゐる。以上種々の方面から宇宙的心靈と呼稱することの妥當なることを論究して來たのであるが其證據を諸經論に尋ねるならば際限がないから、一二の大乗經を引くことにします。

(一)涅槃經長壽品には「一切衆生の生命は悉く如來の生命から出る、如來の生命は阿耨達池の如く、一切衆生の生命は其れから流れ出る四つの河の如くである」と云てある。

(二)又同品に「山川等の壽命が悉く如來の壽命中に歸入することは喩へば八大河の海に流入するが如くだ」と説てある、故に出生入死ともに宇宙的全一なる如來全身を離れぬのである。

(三)また華嚴經出現品には「一切衆生の智慧は地中を流れる水の如く、佛の智慧は大海の水の如し」とある。是は佛智と衆生智とを比較して、大海の水が氣體となつて上昇し更に雨露と成て落下し、そして地中に滲み込むのだから大海の水と地中の水とは畢竟一如であることを譬へて、佛智と衆生の智慧とが大小こそあれ本質は一つであることを述べた

ものである。私は衆生の心を井戸の水に譬へる。井の水には清濁あり多少があつて差別し有限化せられてあるが此の水が同時に無限の水に通じてゐる。故に井の水が涸れても水そのものは盡きたのではない。形を變じて他の水となつたのみである。同様に有限なる衆生の生命は無限なる佛の生命に通じてゐる。かやうにして生佛の關係は有限と無限との關係であり親と子との關係であります。

次に禪宗の人の語を引て前言の證を取るならば是も亦澤山あります。宏智の『刹中の佛、處々に身を現じ、佛中の刹、塵々みな爾り』と云ふが如き、刹土即ち世界中に佛があり、佛は如何なる所にも現はれてゐると云ふことで、また佛の中に世界があつて一塵一塵が佛であるといふ。

斯の如き言葉は如何に見ても宇宙的なる佛と云ふより他に云ひ様がない、楊岐山甄叔禪師は『群靈一源、假に名けて佛となす』と云ひ、洞山大師は『一物あり上は天を拄へ、下は地を拄ふ』と云ふ如き、此等の語だけでも宇宙的心靈なる私の詞が獨斷ではなく先聖に違背して居らないことが知らるのみならず、斯かる主張が佛教終局のものであると云ひ得る。そして此の宇宙的なる心靈を提示しこれに歸投せしめんとするが諸宗の極意であつて、淨土門の彌陀を信ずると云ふも要するに此の無限なる生命の佛を信ずると云ふのであり、華嚴の毘盧遮那如來と云ふも眞言の大日如來と言ふも又法華經に久遠實成の佛と云ふも皆この佛を云ふのであります。法華經に慧光照無量、壽命無數劫と云ふも此の佛の徳を讚歎するのであります。故に道元禪師は『如來の神力慈悲力壽命長遠力、よく心を拈じて信解せしめ、身を拈じて信解せしめ、盡界を拈じて信解せしむ』と示されてゐる。されば禪師が所説の法門を佛法の總府と云ふので、是は佛教

中の一部を宗とし他宗他門と對立する小さなものではない。

以上で大體本尊のことは説き終つたこと、思ふが、此處に注意して頂き度いことは、我々はかゝる六ヶ敷い佛教々理やその發達を知らねば信仰生活に入り得ないと云ふのではない、道元禪師は『わが身をも心をもはなち忘れて佛の家に投入れよ』と仰せられてゐますが、我々は我が此生命は佛の生命であると信受して此身心を放下して佛の家に投げ入れ即時に信心を打立るのであるから、六ヶ敷い佛教哲理や教理の發達を知らなくても安心には一向差支へないのであります。譬へば電車に乗るのに電氣學や機械に關する知識が無ければ乗れぬと云ふことではない。たゞ規定の料金さへ支拂へば安全に乗車して目的地に達することが出来る。今佛法に入るのにも同様であつて信仰と云ふ料金さへ拂へば無事安全に目的地に達せられる、學的研究は其の道の専門家に任せて置けば宜しい。我々は安心して信に入り喜を以て佛德體現の生活を行すれば充分であります。私が是迄縷々述べて來たのは成佛を遂げる必須條件として説いたのではなく、たゞ私の言ふことは佛説ではあるまいなどと云はれる人もありますので申上げただけであります。要するに吾々は全一なる宇宙的如來を信じ、これに歸依しその德を體現して報恩の行と喜びの生活を送るべきであります。(完)

(日曜講演筆記・文齋在記者)